

レンサルティング®で時代を拓く

AKTIO

AKTIO

November
No.18

Communication Magazine

■ AKTIO TOPICS

建設・測量生産性向上展

CSPI EXPO会場レポート

■ AKTIO 社会貢献

アクティオの森

ビーチクリーン、イベント協賛

KEY PERSONに聞く

業界の人手不足に貢献

IoTの力で革新的サービスを

新サービス始動!

AKTIO × IoT

KEY PERSON

に聞く

建設業界には、少子高齢化社会の縮図ともいえる現状がある。ベテランの知見が継承されず、若手がなかなか入ってこない、人手不足の中起こってしまう思わぬ事故や工事不具合の発生…。2017年1月、そんな建設業界の課題を解決するべく発足したIoT事業推進部。建設機械レンタルに先端技術を融合することで生み出せる価値を、中湖専務、山口執行役員（IoT事業推進部長）、藤澤課長のお三方から話を聞いた。



VOL. 004

職人氣質×最先端のIoT技術。
一見相反する2つの価値観が、
信頼と新しいビジネスを生み出す。

専務執行役員
レンタル本部部長

中湖 秀典 *Hidenori Nakako*

入社以来、新規市場や新商品の取り込みなどを担当。新入社員のころに当時社会問題になっていた「振動騒音公害」を低減する杭打ち機械を拡販、国交省情報化施工戦略に基づいて道路機械事業部を立上げ、2016年から建設業の人手不足解消策であるi-Constructionを推進。2017年よりレンタル本部を開設。現在IoT事業推進に従事し、レンタル本部とIoT事業推進部をつなぐ役割も果たしている。

▼IoT事業推進部の始まり、そのメンバーについて教えてください。

AKTIO 30周年のときに小沼会長が「これからはレンタルだ」とおっしゃったのが始まりで、それを具現化する際にIoT事業推進部の芽が生まれました。建設業界の人手不足、技術者不足、若い人が入ってこないという状況から、作業の機械化・デジタル化を進めるべき、という機運が高まり当社でもIoT事業の推進に注力することになりました。IoT事業推進部にはどんなメンバーが必要か、と検討を始めたのですが、意外かもしれませんが、建設機械レンタルの業界は理系の人間が少ないんです。社内でヒアリングを重ね、各々得意分野を持った理系のメンバーを集めました。少数精鋭のチームです。

現在、IoT事業推進のためにどのような活動をしていますか？

この事業を全国へと広げるためには、地元で開いたり、お客様に具体的にどのようなものかを知っていただくきっかけになるよう「レンタルフェア」という展示会を開いて、この当社の技術に触れていただく活動をしています。また、一般営業しながらもIoT事業についてお客様をフォローしたり、当社のIoT事業をPRできる人間を増やしたり、今後彼らの活躍で裾野を広げていけたらと思っています。

発足した時からこれまでに苦労した点はないかありますか？

IoTでの大変さはこれまでのものとはちがうと質が違いますね。当社は技術を持ったスタッフが大量にいるのですが、それでも「新しい技術を始めるとなると、ちよつと躊躇がある…。まあ、人間だれでも新しいことに挑戦するとなると、ためらう気持ちが出てきて当然でしょう。それを奮い立たせる。この挑戦が世の中の役に立つんだ、それが自分たちのこれからの仕事にもつながるんだ、将来はみんなそうやっていくんだ、というのを知ってもらって、理解してもらおう…。大きな目標を同じ目線でとらえて足並みをそろえていく、ということが大変だったといえるかもしれません。

これまでIoT、ICTの普及、啓蒙活動を通じて、感じたことを教えてください。

現場の「見える化」が急務だ、ということですね。先にお話した通り、業界全体でベテランが引退していく、若い人が入ってこず育たない、そんな中、つっかり発注すべき機械の手配を忘れてしまうことも…。そうなったとき、IoTがない状態では「現場が止まってしまう、いますぐ○○持ってきてー」というのがお客様の要望。こちらとしては精一杯お応えするけれど必要な機械がなければ探す時間、配送する時間、配送するための車がなければそれを用意する時間、とあつという間に数十分、数時間経過してしまったりする。するとお客様からは遅いと不満が出てしまう。「一生懸命手配しているのに、悪循環ですね。でも、我々がやるうとしてIoT、ICTの世界では、全部が「先回

「です。その現場で次のステップが必要になるであろう機械も、燃料の不足もいずれ全部が一元管理できるようになります。現場の「見える化」が進むことで作業が止まってしまうような事態は防げますし、これまでなら「運」に言われていた当社の営業担当者や配送担当者が「ありがた」と言われるようにもなる。お客様に感謝されることは我々に与っては喜ぶべきことです。モチベーションが上がること。いろいろなお客様のためのこと、役に立つことを提案しようという気持ちになる。お互いにとっていい環境ができればと考えています。

最先端、というけれど、結局は現場の苦勞を少しでも解消できたら、という思い。これに尽きます。かつてエンジンといわれる職人さんたちがいたら起きなかつた事故も、最近の世の中はと嘆くよりも、じゃあこの状況で事故の起きないベストな環境をつくるために何ができるかを考えたほうがずっと前向きです。お互いがニコッと笑って仕事ができるために。工期通り安全にいい仕事をして、AKTIOと組んでよかった、また次もお願したい、と思ってもいいでしょうし、いいと思います。

IoTやICTの発達で人間味のあるコミュニケーションが減るどころか、むしろ円滑なコミュニケーションのためのお手伝いになっていくんじゃないかなと思っんです。私たちは常にお客様のために動いていますから。

仕事に対する、熱い気持ちが伝わってきます。直近で行った勉強会についてはどうですか？何が気づいたことかあれば教えてください。

ICTの話になってしまいましたが、昨日三重県で勉強会を行いました。ICT



施工を地元にも広めるために県職員の方々向け、次は受注者、作業する建設会社様向けの講習会を行います。

現場の方がICT施工の仕上がりを見たとき、ベテランの職人以上の仕上がりだ、スピードも速いしこんな仕上がり久しぶりに見た、と喜んでもらえることが多いです。でも現場監督さんからは、過去に経験がないから予算感がつかめない、以前の機械と比較すると機種あたりの単価が高くなる、その印象で導入を避けられてしまったため、理解を得られないよう説明していかないと私たちの大事な役割だと思っています。「見費用が高くなるように見えても、施工性が上がり、結果的にはみなさんのためになる、という」ことを誠実に説明していかなくてはならないと思っています。

一番大事なのはお客様のお役に立つ、そして、仕事を止めないというところ。いろいろな商品があると自分勝手に「いいです」「いい」と薦めたくなくてしまつたのですが、どんなにいいものでも、そのお客様にそれがピッタリとは限りません。お客様のニーズを見極め、最適な提案を続けていくことがレンタルディングの基本。これからもAKTIOのIoT事業について理解を深める活動を続けたいと思います。

業界から熱視線！ 問い合わせ多数の 「燃料給油サービス」登場！



執行役員
IoT事業推進部長

山口 剛

Tsuyoshi Yamaguchi

コンピュータシステムの開発におけるエンジニアであったが、アクティグループの基幹システムであるARMSの開発プロジェクトに参画し建機レンタル業界へ。ITグループ長を経て支店や本社での経験を積んだ後、IoT事業推進部長に。建機レンタルのアナログな現場作業とIoTを基本とした先端技術を融合して新しい価値を生み出すことを目指している。

▼いよいよIoT事業推進部のサービスが具現化しました。「燃料給油サービス」が、これからのように進むのかお話しをお聞かせください。

現場に在庫した発電機にIoTデバイスを取り付けることで、その発電機に関するさまざまな情報を遠隔地から常時確認することができるようになります。そのさまざまな情報の一つが、燃料。この燃料の変化を時系列にとらえることで給油タイミングを予測します。

第一弾としては、予測した給油タイミングを現場へお知らせするサービス。その結果、現場にて契約している燃料サプライヤーが適切なタイミングで給油を実施し発電機のガス欠を回避することができます。第二弾としては、燃料サプライヤーと当社が契約をすることで、現場としては燃料サプライヤーの選定から日々の給油指示まで、給油にかかる作業を限界まで少なくするサービスを考えています。

リリース発表直後はすごい反響だったとお聞きしています。

そうですね、笑。直接お取引がある建設会社様、燃料サプライヤー様、燃料会社様にもこういう形で協業をする可能性がある、というリリースを出しました。特に反応が大きかったのは、燃料サプライヤー様でしたね。

現場へどれくらい燃料を持っていかば十分か、わからず「持っていきたいだけ現場で給油をする」と足りない、慌てて戻ってもう一回、ということも現場では多々あります。逆に、多くの燃料をつんで現場へ向かって

ほとんど給油の必要がなかった、など、燃料サプライヤー様の作業ではこのサービスが大きく役に立つ可能性があり、期待も大きいです。

どのようにしてこのサービスについてお考えになったのでしょうか？

お客様にお貸しする機械が「主体的に情報発信するようになる」という点、その価値を生み出せるか？まずチームで検討するところから始まりました。検討したいくつかの価値の中で、集約すると「安全・安心・見える化」の3つの観点が挙がり、その中で燃料給油サービスに最初に着手したのは、当社が水中ポンプのレンタルから始まり、水中ポンプを動かすには発電機が欠かせないものである、という点。創業時からずっと大事にしてきた発電機に必要な給油サービスからまず形にしていきたい、ということからスタートしました。

実用化に向けて、難しかった点はどんなところでしたか？

はじめてのIoT化のチャレンジなので、技術的な壁はいくつもありませんでしたが、「新しいサービスを生み出す」ということに関していえば、難しい点はなかったです。お客様のためのもの、という「点」だけ。燃料のガス欠で現場が止まるということが限りなくなくなる、という価値を提供できる、だからこのサービスを実現させなければ、という思いが強かったです。そこに足りない点があるか、どこにアイデアがあるか、つねに部署内で話し合っている中で、生み出すことに苦勞を感じないのは、今のこの少数精鋭の

チームのおかげかもしれませんね。また、レンタルディング本部と月に2回会議を行っている、新しいアイデアの現状報告や現時点での進捗などをシェアしているの、そこからまた新しい発想が生まれることも多くあります。

このサービスの課題について教えてください。

全国に展開しているお客様の現場に対し、どうネットワークを構築していくかは大きな課題です。燃料業界という、歴史のある業界と新たなサービスを全国展開を進めていくのは難しいことだろう、と。私たちのお客様である建設会社様からしても、燃料会社様は大事なお客様。という形で協業ができるのか、私たちがお役に立つにはどうしていくのがベストか、これからのいろいろ検討していかなくてはなりません。

また、建設現場からのご意見でいうと、重機の給油がとても重要なので、そのサポートをすることができたら、さらに価値を提供できるのではないかと考えています。サポートの領域を広げていくことが今後の課題ですね。まずは発電機からスタートし、次は重機の燃料も把握、現場全体の給油のめどを把握できる環境に移行したいと考えています。

まだまだこれから発展する事業ですね！今後の計画について教えてください。

今はまだ、IoTデバイス自体がワンオフ（ある目的のために製作された専用品のデバイスなので、まずは製品化。これを年内にすませて2、3の現場で実用化を考えています。そして2020年半ばまでに東京近郊の発電機に1000台くらいを目安に装着、2020年後半で関東域に広げ、関西に広げ、と徐々に全国展開を目指していきたいと考えています。

さらに、発電機以外の横展開。各メーカー様は自分たちの重機で情報が取れる機能を持っています。AKTIOとしてはそれら重機のデータを共有していただけるか交渉を始めていて、いくつか快いお返事をくださったメーカー様とまもなく協業がスタートします。これからも「お客様に価値を提供する」ということを常に追求していきたいと考えています。

躍進を続けるAKTIOの IoT事業推進部については、 No.19に続きます！

問い合わせ殺到の「VR安全教育システム」について、藤澤課長からお話を伺います。どうぞお楽しみに。



熱気あふれる会場をレポート!

2019年5月22日から24日の3日間、千葉の幕張メッセにて2回目のCSPI EXPO(建設・測量生産性向上展)が行われた。建設業界・測量業界の最先端の機械・設備・技術・サービスが数多く展示され、その専門性から関心・注目が高まっている。私たちAKTIOのブースにも多くの方が訪れ、特に体験コーナーではセーフティトレーニングシステムVRやドローン操作を実際に来場者に行ってもらえる内容になっており「このVRすごいリアル!」「ドローンの操縦ってこんなに難しいの!」などと参加者から驚きの声が上がっていた。また、現在、力を入れているAKTIOのIoTプラットフォームを活用した燃料給油サービス(P2~5の特集ページに詳細を記載)について詳しく説明、システムの一部を実際に見てもらえる展示スペースも充実。AKTIOの商品・サービスを理解してもらえるよう工夫を凝らした内容で、たくさんの方々と触れ合える出展となった。



建設・測量生産性向上展

CSPI EXPO

CSPI EXPOに登場したAKTIOの技術の数々

トモロボの展示

トモロボは、市販の手持ち電動工具をセットするだけで鉄筋工事の単純作業である「結束作業」を自動化できる協働ロボット。建設現場の生産性向上と作業員の負担軽減を目的に開発され、12時間の稼働で約9000箇所を結束することができ、手慣れた職人が1日作業しても結束できるのは6000〜6500箇所程度。しかもこの作業は単調でつらく、時には炎天下で長時間の作業となることもあり、人手不足による供給力低下が懸念されている。トモロボは、職人が単純大量作業から解放され技能が必要な作業に集中する環境をつくるために重要な役割を果たしている。



Whizの展示

ビルメンテナンス業界において、清掃業務の人手不足・高齢化対策は重要な経営課題。Whizは導入も使い方もかんたんなお掃除ロボットであり、清掃したいルートを手押しでティーチングするだけで設定が可能。2回目以降はスタートボタンを押すだけで記憶したルートを自動清掃し、「スマートAI清掃」で走行ルート上の障害物や段差、人の動きを感知し状況に応じた回避・一時停止も行う。稼働情報はスマホPCからいつでも確認でき、1時間最大500m、最大約3時間稼働で1500mの清掃が可能。

「顔認証」通門管理システムの体験ブース

これからは工事現場への入退場記録も次世代に。従来通りの入退場管理では、ICカードの貸し借りやそもそもカードの発行に時間も費用もかかり、スポットで入る作業員の管理は難しくなってしまう。そこで顔認証による本人確認を導入すればなりすましや不審者侵入も防止でき、新規登録に時間・コストがかからず受付業務の運用コストまで削減できる。AKTIOの通門管理システムは誤認率0.001%以下、顔だけの認証なら3000人まで登録でき、設定は簡単、凹凸を検知して認識する三次元顔認証のため写真での認証はできず、ネットワークにつなぐことで多拠点運用も可能。この体験ブースでは認証の正確さ、早さを実際に感じてもらうことができた。



発電機自動運転盤の展示

AKTIOのオリジナル商品で、発電設備計画や設計の相談に柔軟に対応できるのが強み。停電時に非常用電源を自動供給、無人の対応が可能。例えばゲリラ豪雨時、この発電機自動運転盤を中心に水位計と排水ポンプを組み合わせ、急な豪雨で現場の水位が上がったら自動始動、連動したポンプが排水を行い大切な機器の水没や作業所の浸水被害を防ぐことができる。また複数の発電機をプログラムで制御して、無人で複雑な制御を行うことも可能だ。

バッテリー式運搬車の展示

AKTIOが取り扱うのは、排気ガスを発生する駆動システムとは違い、室内でも安心して使用できるバッテリー駆動方式のクローラー式運搬台車。8時間の充電で連続15時間の運転が可能。最大登坂は40度、斜面時の最大積載量は500kg、平地時は1000kgまで運搬できる。超信地旋回方式を採用しているため階段の踊り場など狭い範囲での旋回も可能なため、地下鉄工事やビル改修工事などの建設資材運搬に活用できる。無線リモコンもあり、タッチメントを換えることでパネル運搬や建設カラの運搬などさまざまな用途に対応する頼もしい1台。先端にカメラをつけ、トンネル工事の検査用にも利用されている。



軽散水車の展示

業界初、車両発電による発電機レス設計の散水車は、これまでありそうでなかった小回りのきく軽自動車。エンジン式高圧洗浄機を使用せず前方圧力散水、後方重力散水、車両左側方散水、車両右側外部散水といった装置を設けることで、軽自動車の最大積載量である350kgの水を搭載可能に。またタンク内に藻が発生するとノズルが詰まる原因となるため、紫外線を通してにくい黒色タンクを採用。散水車は、災害時に道路にたまった泥などを排出するために使われたりもするが、軽散水車ならボランティアの方でも運転しやすく、利用価値は高い。

HAL®の展示

HAL。腰タイプ作業支援用は、脳から筋肉へ送られる生体電位信号を読み取ることで装着者の意思に従った動作をアシストし、物を持ち上げるとき、運ぶときの腰への負担を低減。作業現場での労働環境改善、腰痛を引き起こすリスクを減らし、労働災害防止への活躍が期待できる商品だ。充電式バッテリー駆動で電源コードを気にすることなく、狭い倉庫内や広範囲の移動にもわずらわしさを感じることなく作業できる。

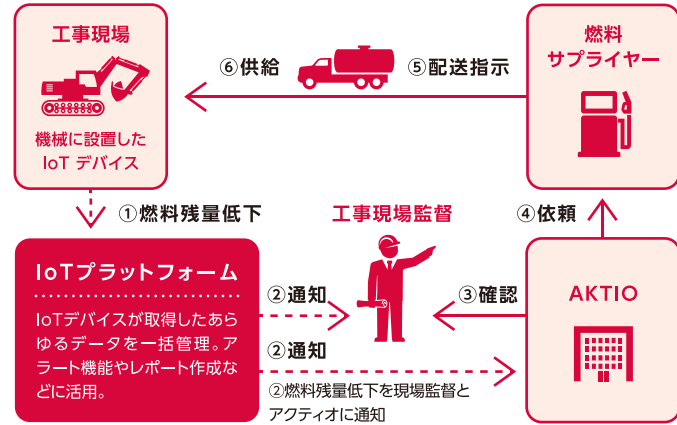
森林レーザーの展示

日本は豊かな森林資源をもつ一方、林業従事者の高齢化、人手不足や木材の自由輸入などさまざまな要因で林業の衰退が懸念されている。AKTIOが提案する森林レーザーは、ドローンに搭載したレーザーで対象となる森林を測定。各樹木の位置、サイズ、種類、材積量の算出、地形の調査もできるため、最適な作業道の設計に生かすことができる。森林データベースの構築と運用調査作業の自動化と機械化を図り、業務の効率化に貢献する。



IoT燃料給油サービスの展示

特集ページでもご紹介した「IoT燃料給油サービス」も会場に展示。AKTIOは機械のIoT化を推進、メーカーを問わずあらゆる機械にデバイスを取り付け、情報をクラウド上でどこでも把握・二元管理できるようにサービスの開発を進めている。燃料給油サービスの場合は、IoTプラットフォームでデバイスが取得したデータを蓄積・管理し、アラート機能やレポート作成などに活用。燃料残量低下を現場監督とAKTIOに通知し、AKTIOから燃料サプライヤーに給油を依頼することで、適切な燃料管理が可能になる。



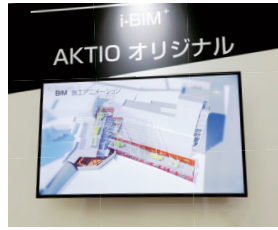
電動バイクの展示

工事現場での連絡車として活用するのにぴったりの電動バイクは、CO₂排出ゼロ、静音性に優れた環境にも配慮した移動手段。オイル・チェーントラブル等の修理代がかからず、排気ガスが出ないため屋内の現場でも使用できる。家庭用100Vコンセントで簡単に充電でき、1回の充電で約150km走行できるのも魅力だ。



i-BIM+の展示

いまや建設業に必須ともいわれるBIM/CIM。建築物の計画段階から3次元データを使ってプロセスを進めていくこの新しい手法は、取り組み始めたものの使いこなせる人が少ない、初期投資が大きすぎて1社ですべてを行うおと思ったら大変なコストがかかるという導入の課題が多いものもある。そこでBIM/CIMの導入から運用まで一括でサポートするサービスが「i-BIM+」だ。各種セミナーやオンラインによる人材教育支援、プラットフォームや測量機器などの機材提供、墨出し効率化や3Dスキャナなどの活用支援を提供。日本における本格的なBIM/CIM導入の普及推進に貢献する。



路面乾燥車の展示

屋外会場に展示された路面乾燥車は、従来型の直火タイプ(バーナー7本で900℃)とは異なり、バーナーの熱を送風機で送り路面を乾かす熱風タイプ。路面を傷める心配なく、冬季の道路工事で雪や氷を溶かしたり、濡れた路面を乾燥させることができる。また4基のバーナーは独立制御が可能で、両端の2基のバーナーを1基といった使用も可能だ。夏季はさらに高架での舗装工事を行う際の下地処理として、防水シートを乾かす際にも有効だ。



UAVドローンの体験ブース

ドローンは高性能で簡単に飛ばせるが、それだけに機械を過信して自分で操作していると錯覚してしまいがちだ。その操作技術を体験してもらおうと、「ドローンは制御不能になると操作が難しく落ちるものだ」と実感してもらおう場となった。ドローンによる3次元計測は短時間で広範囲をカバーでき、作業員では現場調査が困難だった高所や危険地域の計測も可能に。さらにAKTIOが提供するサービスは、その空撮画像からコンピュータで周辺の歪みを補正した真上から見た画像を生成したり、建築現場の3次元モデルや概算土量算出などとなり、設計から施工、竣工に至る業務の効率化に貢献する。この体験ブースはドローンの活用についての理解促進、導入の検討につながった。



セーフティトレーニングシステムVRの体験ブース

「現場から事故をなくしたい」とその思いで開発された、不安全行動をVRでリアルに体験、注意喚起するためのトレーニングシステム。会場ではバックホーで倒れてしまう場面とオペレーターが作業員に気づかず巻き込んでしまう場面を体験してもらった。高画質5K、視野角210度、バックホー実機に乗っての体験とあって、来場者からは「わかった」「本当に倒れる感覚があった」という感想の声があふれた。この実感の伴った安全教育は非常に好評で、今後もコンテンツを拡充予定。



SRS Corporation

エスアールエスも高所作業車などをデモンストレーション!

今回のCSPI EXPOは、アクティオグループのエスアールエス株式会社も初出展となった。高所作業車やアタッチメントなどの展示・デモンストレーションに加え、フォークリフトや車両系建設機械、高所作業車等の資格取得のための相模原教習センターについても、お客様に直接ご説明できるいい機会となった。

▼ グラブクルッターT.Cut

木をつかんで切って、さらにつかんだまま運べるスグレモノ。チェーンソーでの伐採より大幅に作業時間を短縮。



▲ プロハウス

オプション展開豊富なプロハウス。エアコン、トイレ、キッチン、風除室など25種ほど用意されている。

▼ ショベル装着型杭抜き機 アポロンAG6400

建物の解体工事が終わった後、地中に残っている杭を油圧ショベルで引き抜くことができるアタッチメント。



▲ 自走式Z型ハイブリッド屈伸ブームリフト Z60/37FE

バッテリー・エンジン併用可能。プラントやヤードの点検・整備での活躍が期待されている。

FISE HIROSHIMA 2019

**AKTIOならではの！
アーバンスポーツの祭典をパノラマ観戦！**



国際的な都市型スポーツのフェスティバル「FISE」は、世界最高峰のアーバンスポーツ大会として注目を集めている。今回AKTIOが協賛した広島大会では7種目が開催。BMXのフリースタイルやスケートボード、ボルダリングにブレイクダンスと、注目の競技が一堂に会し会場は熱狂と興奮の渦に。AKTIOは高所作業車でのパノラマ観戦を実施、3日間で871名もの方が地上12mでのパノラマ観戦を体験した。また、多くのメディアが高所作業車を取材に活用するなど、AKTIOらしさが際立つ祭典となった。

第38回横浜開港祭

**建設現場とは違う働きを。
AKTIOのレンタルティンクの柔軟な姿。**



2019年は横浜開港から160年の記念すべき年。6月1日～2日に行われた神奈川県最大級のイベント「第38回横浜開港祭」は、各種イベントやコンサート、花火で大きな盛り上がりを見せた。毎年およそ75万人もの来場者を迎えるこの催しに、AKTIOが協賛。AKTIO横浜支店よりおよそ50台の発電機や、7000個ものカラーコーン、LED投光器などを搬入設置。建設現場とは違い、イベントとして「見た目」も重要なこの案件のためにカラーコーン7000個はほぼ新品を準備し、発電機の設置で養生に使うプラスチックも通常の黒ではなく、肌色のもも数百枚を使用した。さらにAKTIOと発電機メーカーが共同開発した「サイマル発電機」は、万が一の燃料の流出に備え防油堤を備え、オイルタンクも条例で定められた容量をクリアしながらも最大限のものを搭載。機材の搬入設置、運転、安全誘導、撤去作業にも社員一丸となって携わった。これからも地域に貢献し地元を盛り上げるイベント分野に力を入れていく予定だ。

企画展「工事中！」

**ショベルカーや大型クレーンなどが大集合！
異色の展示が大人気に。**



2019年2月8日～5月19日まで日本科学未来館で行われた企画展「工事中！」は、14万8223人もの方が来場。ショベルカーや大型クレーンなどの重機にスポットを当てる異色の展示会に、会場はまるで工事現場のような雰囲気。訪れた子どもたちが目を輝かせているのが印象的な展示となった。ITで工事現場が変わるといふこと、これまでの印象とは違う建設業界やその職種について、子どもたちに将来の選択肢としてときめきを感じてもらえたことは、今後の業界の発展にもつながると感じた。重機は、実は暮らしを支えている、現代の生活に必要な不可欠な存在だということが子どもたちにも伝わり、またその大きさ、迫力に「わくわくする」「現場ってかっこいい！」という魅力もアピールできた。重機のかっこよさに安全、安心、快適さを加えることができる、AKTIOの存在意義を、こういった展示会の協賛等を通じて今後ももっとアピールしていきたい。



アクティオの森

**森を育てるといふこと。
新入社員の貴重な経験に。**

「やまなし森づくりコミッション」は、森づくり活動に協力する企業と、森林所有者、市町村、森林組合などの林業事業者やボランティア団体の橋渡し役となり、地域と一体となった森づくり活動をサポートしている。AKTIOはこの活動に賛同し、山梨県笛吹市御坂町の檜峰神社の森林内に「アクティオの森」を誕生させた。毎年、新入社員が中心となり保全活動を行っている。

この活動は、「レンタル業界最大手であるAKTIOはCO₂の排出量も業界最大、その立場から社員一人ひとりが環境に配慮する意識を持つことが不可欠だ」と、社長である小沼直人が発案。社員同士の交流も含めて毎年5月に間伐や植林などのイベントを実施している。これからもレンタル業界のリーディングカンパニーとして、森を育てる活動を続けていく。

ビーチクリーン活動

**なんとダンプカー3台分ものゴミ！
AKTIOグループ社員の手で
海岸をきれいに。**



今年で13回目となるビーチクリーン活動が木更津海岸で行われた。社員やその家族などが参加し、海岸に沿って500メートルの清掃・ゴミ拾いを行う。約1時間でダンプトラック3台分ものゴミが集まった。なかにはバスタブ、チャイルドシートなどの粗大ゴミもあり、海洋ゴミ問題を考えさせられるきっかけにもなった。またこの清掃の様子は各種メディアでも紹介された。

AKTIOグループは地域に貢献したいという思いからビーチクリーン活動を続けており、神奈川、北陸などでも行っている。活動後には、きれいになった海岸で潮干狩りを楽しんだ。地域社会への貢献に加え、社員同士やその家族との親睦が深まる活動として、今後も継続して行っていく予定だ。





今日も
ごあんぜんに
みんなを守る、みんなの安全

+ 今回のテーマ

「保護衣着用の義務化が始まりました」

厚生労働省より労働安全衛生規則の一部を改正する省令(平成31年厚生労働省令)が公布され、2019年8月1日より、林業においてすでに義務化となっている保護衣の着用が、造園・土木建築・請負業などチェーンソー作業を業務として取り扱うすべての業種で対象となります。



- チェーンソーによる伐木作業等を行う場合において事業者、労働者の下肢の切創防止用保護衣(防護パンツ、チャップス等)を着用させることが義務化されました。
- 労働者においても着用することが義務づけられました。

林業における労働災害による死亡事故の内、約6割がチェーンソーによる伐木作業時に発生しています。チェーンソーで自分の身体を傷つけてしまう事故が後を絶たず、そういったチェーンソーによる切創は圧倒的に下半身に集中します。この部分を守るためのものが保護衣です。保護衣を適切に着用し、安全な作業を心掛け、事故防止を徹底しましょう。



保護衣選定のポイント

POINT.1 /

前面にソーチェーンによる損傷を防ぐ保護部材が入っており、日本工業規格T8125-2に適合する防護ズボン又は同等以上の性能を有すること。

POINT.2 /

身体に合ったサイズのもを着用すること。既にソーチェーンが当たって繊維が引き出されたものなど、保護性能が低下しているものは使用しないこと。

POINT.3 /

チャップスを着用するにあたっては、留め金具式の場合はすべての留め具を確実に留めた上で、左右にずれないように、適度に締め付けて着用すること。

保護衣の一例

脚カバー(チャップス)

簡単装着で、手軽に扱いやすい



ソーチェーンに繊維が絡みつくことで切創事故を低減します。ウエストと脚部は、取り外しと調整が容易なバックル方式です。

※アクティオでも取り扱いを始めております。

*出典:厚生労働省 安全衛生関係 リーフレット「伐木作業等の安全対策の規制が変わります!~伐木作業等を行うすべての業種が対象~」

編集後記

皆様、今年の新米は、食べましたか?実家でお米を作っているの、新米が出回る時期になると、昔、稲刈りを手伝ったことを思い出します。昔は、稲刈りなんて嫌だな~なんて思っていたのですが、今となっては、いい思い出ですし、またやってみたいと思ったりしています。さて、主食といえば、ごはん食が主流だった日本ですが、最近はパンなどいろいろな主食を取る人も増えていることに加え、主食抜きという人も多くなってきているようです。お米のメリットの1つは、主要成分であるデンプンが、体の中でブドウ糖に変換し、エネルギー源として脳の動きを活性化させる役割があること。長期的にお米を食べ続けると、

おのずと脳の動きを活性化させることに繋がります。お米には多くの種類がありますが、お米の種類がひと目で分かる、ごはんソムリエ監修の【好みのお米が見つかる!ごはんソムリエ監修チャート】というものがあります。チャートを見ながらいろいろなお米を食べ比べてみたり、お料理によってお米を変えてみるという楽しみ方もあります。私もお米を食べることの大切さを改めて認識しながら、実家のお米以外にもさまざまなお米に挑戦したいと思います。

営業企画部 広報課 成澤



今号の表紙写真

今回の特集は「IoT」。建設業界で問題となっている人手不足の解消にも、スムーズな現場環境にも、IoTが役に立っていることを日本の夜の街で表現しました。発達し続ける、眠らない都市にこそ、欠かせない最先端の技術力。今後もAKTIOのIoTにご注目ください。